

<報告>

長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ Part IVの報告

Report on the “Takeko Nagashima & Minoru Umemoto  
Lied Duo Recital from Romantic to 20<sup>th</sup> Century Part IV ”

長島 剛子

NAGASHIMA Takeko

本稿は2022年秋に札幌（10月15日 17時開演 ザ・ルーテルホール）と東京（10月27日19時開演 東京文化会館小ホール）で開催した「長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ Part IV (H. ヴォルフとその後)」の報告及び、プログラム・ノートに加筆・再構成したものである。シリーズ第4回となるこの演奏会では、「H. ヴォルフとその後」をテーマにして、前半に H. ヴォルフと20世紀作曲家によるゲーテ歌曲、後半にはそれ以外のタイプの違う3人の20世紀作曲家の歌曲を演奏した。H. ヴォルフにより一つの頂点を極めたドイツ歌曲が20世紀に入りどのような形で継承され、展開していったのかを様々な作曲家の歌曲を通して探ると同時にそれらの作品の魅力に迫った。

キーワード：H. ヴォルフ、ゲーテ歌曲、20世紀作曲家

## 1. はじめに

2017年にスタートした「長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ」のシリーズ第4回となるこの演奏会は「H. ヴォルフとその後」と副題を付け開催された。H. ヴォルフにより一つの頂点を極めたドイツ歌曲が20世紀に入りどのような形で継承され、展開していったのかを様々な作曲家の歌曲を通して探ると同時にそれらの作品の魅力に迫るのが、この演奏会のねらいであった。

## 2. リサイタルの概要

長島剛子・梅本実リートデュオ・リサイタル ロマン派から20世紀へ Part IV——H. ヴォルフとその後——

2022年10月15日（土）17時開演 ザ・ルーテルホール（札幌）

2022年10月27日（木）19時開演 東京文化会館小ホール

演奏：長島剛子（ソプラノ）、梅本実（ピアノ）

<プログラム>

「20世紀のゲーテ歌曲より」

リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864-1949)：〈見つけたもの〉 *Gefunden* Op. 56-1

リヒャルト・トゥルンク Richard Trunk (1879-1968)：〈ズライカ〉 *Suleika* Op. 40-5

アレクサンダー・ツェムリンスキー Alexander Zemlinsky (1871-1942)：〈妖精の歌〉 *Elfenlied* Op. 22-4、〈旅人の夜の歌〉 *Wandrer's Nachtlied* Op. 27-12

アントン・ヴェーベルン Anton Webern (1883-1945) : 〈花の挨拶〉 *Blumengruss*

ハンス・アイスラー Hanns Eisler (1898-1962) : 〈ゲーテ断章〉 *Goethe-Fragment*

パウル・デッサウ Paul Dessau (1894-1979) : 〈愛の歌〉 *Liebeslied*

アントン・ヴェーベルン Anton Webern (1883-1945) : 〈似たもの同士〉 *Gleich und Gleich* Op. 12-4

フーゴ・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) : ゲーテ歌曲集より 《ミニョンの4つの歌》 *Lied der Mignon* aus den "Goethe-Liedern" 〈語らずともよいと言ってください〉 *Heiss mich nicht reden*、〈ただ憧れを知る人だけが〉 *Nur wer die Sehnsucht kennt*、〈もうしばらくこのままの姿に〉 *So lasst mich scheinen*、〈君よ知るや南の国〉 *Kennst du das Land*

休憩

ヨゼフ・マルクス Joseph Marx (1882-1964) : 〈ノクターン〉 *Nocturne*、〈妖精〉 *Die Elfe*、〈風車〉 *Windräder*、〈ピエロ・ダンディ〉 *Pierrot Dandy*

エルンスト・クシェネク Ernst Křenek (1900-1991) : 《フランツ・カフカの言葉による5つの歌曲》 *Fünf Lieder nach Worten von Franz Kafka* Op. 82

ヘルマン・ロイター Herrmann Reutter (1900-1985) : 《ヘルダリーンの詩による三つの歌》 *Drei Lieder von Hölderlin* Op. 67. 第1曲 〈沈む太陽〉 *Sonnenuntergang*、第2曲 〈夜〉 *Die Nacht*、第3曲 〈人生行路〉 *Lebenslauf*

### 3. プログラムについて

この項では演奏会のために作成したプログラム・ノートに加筆・修正したものを提示する。

「20世紀のゲーテ歌曲より」

リヒャルト・シュトラウス (1864-1949) : 見つけたもの 作品56-1 1903年 (原詩 : 1813年)

シュトラウスは声楽作曲家としては《サロメ》《バラの騎士》等の数々のオペラでむしろ良く知られているが、歌曲も彼の生涯にわたって200曲以上作曲している。この詩はゲーテが生涯に一度結婚した相手であるクリスティアーネとの出会いのことを回想して歌ったものである。最初の出会いから25年経った1813年に作り彼女に捧げている。このエピソードを知ってか、シュトラウスも結婚10年後にこの詩に付曲し、彼の妻パウリーネに捧げた。

リヒャルト・トゥルンク (1879-1968) : ズライカ 作曲年不明 (原詩 : 1816年)

トゥルンクはドイツのタウバービショフスハイム (バーデン＝ヴュルテンベルク州) に生まれ、ミュンヘンで合唱指揮者として活動し、作曲家としては多くの合唱曲と200曲以上の後期ロマン派風の歌曲を残している。この曲は6曲からなる作品40の歌曲集の第5曲である。なおこの詩は『西東詩集』『ズライカの書』から採っている。

アレクサンダー・ツェムリンスキー (1871-1942)：妖精の歌 作品22-4 1934年 (原詩：1780年頃)

シェーンベルクの師として知られているツェムリンスキーは歌曲を100曲程作曲しているが、この曲は中期以降の作品に見られる半音階的和声とガラス細工のような装飾的な繊細さが特徴であり、妖精のコケティッシュな表情の中に暗さと怪奇性が忍び込んでいる。この詩は1780年頃、シュタイン夫人に宛てた手紙の中に残されている。彼女はゲーテより7歳年上の人妻で当時彼の最大の理解者であった。

旅人の夜の歌 作品27-12 1937年 (原詩：1776年)

ナチスによるオーストリア併合の直前に書かれ、ツェムリンスキーの作品番号が付いた歌曲集としては最後のものである。彼は12曲からなるこの作品27の歌曲集をゲーテの詩への付曲で閉じている。この詩は〈旅人の夜の歌 Wandrers Nachtlied〉として知られている2編のうち、最初に書かれたものである。エッタースベルク山腹にて書かれ、シュタイン夫人に贈られた。

アントン・ヴェーベルン (1883-1945)：花の挨拶《8つの初期の歌》より 1903年 (原詩：1810年)

ヴェーベルンは師シェーンベルクと新ウィーン楽派を形成することになるが、この曲は彼がシェーンベルクと出会う前の20歳の時の作品で、まだロマン派風の和声に拠っている。この詩は1810年にゲーテが滞在したボヘミア地方の温泉町カールスバートかテプリッツ (2年後にあのベートーヴェンと邂逅することになる) で書かれたらしい。このかわいらしい恋愛詩はツェルターの作曲のために作られたが、H. ヴォルフ他の作曲家も付曲している。

ハンス・アイスラー (1898-1962)：ゲーテ断章 1953年 (原詩：『西東詩集』『ズライカの書』より「余韻 Nachklang」の一部 1815年)

アイスラーは1898年ライプツィヒに生まれ1962年にベルリンに没した20世紀ドイツを代表する作曲家の一人。一時シェーンベルクに師事したが後に袂を分かち「政治」に密着した創作活動を行い、一般大衆向け音楽を作り出すことに力を注いだ。生涯にわたり歌曲を創作し、テキストを抒情詩から新聞の切抜記事まで広範に選択している。

パウル・デッサウ (1894-1979)：愛の歌 1955年 (原詩：1786年)

1894年ハンブルクに生まれたデッサウは指揮者として活動を始めたが、ナチスの時代はバリ、アメリカに亡命し、戦後は東ドイツで活躍し1979年に東ベルリンで没した。劇場音楽、映画音楽、合唱曲などが知られているが歌曲の作品も多い。この詩はゲーテが隠密での2年間のイタリア旅行に立つ直前に、シュタイン夫人に宛てて書かれた詩の前半部分で、問答形式になっている。

アントン・ヴェーベルン (1883-1945)：似たもの同士 作品12-4 1917年 (原詩：1814年)

この曲は、ヴェーベルンが12音技法を採用する以前の1915-17年にかけて作曲した《4つの歌曲 作品12》の第4曲である。この時期彼は専ら声楽曲の創作に力を注いだが、いわゆる「自由な無調」の時代に入って、楽曲をまとめ上げる拠り所 (機能的和声) を失った作曲家が、歌詞となるテキストにその手掛かりを求めたからだと言われる。内容的には彼の作品番号付きの全歌曲の中で、19世紀の伝統的リート書法に最も近似しているが、ゲーテの詩によるこの第4曲〈似たもの同士〉の冒頭のピアノ前奏は、後の12音技法を先取りするかのように始まる。

フーゴ・ヴォルフ (1860-1903) : ゲーテ歌曲集より《ミニョンの4つの歌》1888年

ヴォルフは19世紀ドイツ歌曲作曲家の最後の巨星とも言われるが、この「ゲーテのミニョン」にはシューベルト、シューマン他多くの作曲家が魅せられ作曲している。ミニョンはゲーテの教養小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中に登場するが、自分の出生について暗い過去を負い、幼いころ故郷から連れ去られ、異国の地で旅芸人の一座に身を投じている影のある少女である。

ミニョン第1曲 語らずともよいと言ってください (原詩: 1782年以前?)

この第1曲は、彼女がたどってきた過酷な人生を人には決して打ち明けることができない宿命にあることを切々と訴える歌である。苦吟するように語られる歌のパートは「時が来れば日が上り」に始まる第2節で激しい高揚を見せるが、再び深い諦観の表情に沈んでいく。ピアノの半音階で動く微妙な和声の変化が、少女の繊細な内面を見事に描き出している。

ミニョン第2曲 ただ憧れを知る人だけが (原詩: 1785年)

「ただ憧れを知る人だけが、私の苦しみを理解できるのです!」に始まるこの有名な詩は、ミニョンと半ば狂気の放浪の豎琴弾き (実はミニョンの父) が調子はずれの二重唱ながら情感豊かに歌い上げた詩である。ドイツ・ロマン派のキーワードの一つである「憧れ」は、「それを激しく希求するが、決して到達することはできないもの」という概念があり、日本人がイメージする受動的で夢見るような「憧れ」とはやや違う意味合いを持っているように思われる。

ミニョン第3曲 もうしばらくこのままの姿に (原詩: 1796年以前?)

すでに精神に変調を見せ始め、養護施設に収容されたミニョンは、誕生日を迎えた双子の姉妹のパーティーでプレゼントを渡す天使の役に選ばれる。裾の長い白い服に金色の翼や冠をつけ天使さながらの装いで少女たちを驚かせた彼女は、本当に天に帰る日までこの姿のままでありたいと願い、ツイターを手にはテーブルに腰をかけてこの詩を優美に歌い始める。同じ詩に作曲したシューベルト、シューマンが長調で作曲したのに比べ、この作品は短調で書かれ、よりいっそう薄幸なミニョンの運命が浮き彫りにされている。

ミニョン 君よ知るや南の国 (原詩: 1782-83年)

これはミニョンが彼女の故郷であるイタリアへの強い憧れと、新しい保護者となったヴィルヘルムに対して寄せ始めた思慕の気持ちを情感こめて歌った詩である。3節からなり、第1節は、レモンの花が咲きオレンジが実る官能的な南国の風景、第2節は彼女が生まれ育った貴族の館、第3節は北国に連れ去られた際に、越えなければならなかった険しいアルプスの印象が歌われている。1節ごとに、「愛する人 Geliebter」から「護ってくれる人 Beschützer」そして「父なる人 Vater」とヴィルヘルムに対する呼びかけが変わっていくのが印象的で、4曲の中で最も壮大で劇的な作品である。

ヨゼフ・マルクス (1882-1964)

1882年グラーツに生まれたマルクスは、20世紀オーストリアにおける重要な作曲家、教育者、批評家として知られている。1914年からウィーン音楽大学で作曲と音楽理論を教えるようになり、43年の教師生活の間に約1300人の生徒を育てたそうだ。(その中には尾高尚忠、有馬大五郎もいる。) 作曲家としては歌曲約150曲を残しているが、1908年から12年の間に集中的に120曲ほど書いた。ロマン的印象主義の大家 (Meister des romantischen Impressionismus) とも言われる彼の作品からは、とりわけショパン、ドビュッシー、スクリャービンの影響が

感じられる。すなわちショパンの繊細さ、ドビュッシーの和声法、スクリャービンの神秘性は作品に色濃く表れている。

ノクターン（オットー・エーリッヒ・ハルトレーベン）1911年

甘い香りを放ちながらさやぐ菩提樹の葉ずれの音を模したピアノのアルペジオで始まるこの曲は、印象派を思わせるような和声の中に官能的な夜の幻想が歌われている。彼の他の曲と同じように微妙なテンポの変化が頻繁に指示されているが、作曲者自身自由に演奏することを望んでいたようだ。二度にわたるピアノの間奏も印象的である。

妖精（ヨゼフ・フォン・アイヒェンドルフ）1909年

いたずらものの妖精たちが、月の光を浴びて屈託なく踊りまわる様が、非常に描写的に表されている。H.ヴォルフの同名の曲〈妖精の歌 Elfenlied〉を連想させるが、この曲では最後にピアノの低音で1時の鐘が鳴る（ヴォルフ作品では曲頭に11時の鐘が鳴る）。

風車（オスカー・ファルケ）1906年

ピアノの風車を表す音型によって静かに始まるこの曲は、しみじみとした情感の中に夕暮れから夜にかけての神秘と幻想に満ちた情景を歌っている。時の経過につれて変わる風車の回る様が、やや過剰とも言える和声の変化で表されている。

伊達男（アルベール・ジロー／オットー・エーリッヒ・ハルトレーベン独訳）1909年

ピエロが舞踏会へ出かける前、月光の下で身支度をするという内容の詩が、ワルツのリズムによってシニカルに描き出される。そこにはウィーン世紀末の退廃的な雰囲気が濃厚に漂っている。同じ題材をシェーンベルクは《月に憑かれたピエロ 作品20》の第3曲で取り上げているが、両者の作風の違いは明らかである。

エルンスト・クシェネク（1900-1991）：フランツ・カフカの言葉による5つの歌曲 作品82 1937-38年

1927年にライブツィヒで初演され、その後ヨーロッパ中を席卷したオペラ《ジョニーは演奏する》によってクシェネクは一躍時の人となった。しかしこの作品がジャズの要素を取り入れ、黒人ジャズ奏者を主人公にしていたことで、ナチスから退廃音楽として目の敵にされた。クシェネクはオーストリア併合直前の1937年にアメリカ亡命を余儀なくされるのだが、翌1938年にデュッセルドルフで開催された悪名高き「退廃音楽展」のポスターにはジョニーの肖像が使われ、退廃音楽の象徴とされた。（ここでジョニーはダヴィデの星を胸に付けサクスを吹きながら登場する。）12音技法を採用したこの《5つの歌曲》に使われている歌詞はカフカの『罪、苦悩、希望、真実の道についての考察』、『八つ折判ノート・八冊』及び『断片』からの抜粋である。自伝によると彼は1937年10月11日にウィーンを去りアメリカに亡命する際、出発の1時間前に突然思い立ってこのカフカの文章を本から写し取り、船上で作曲に取り掛かったらしい。各曲が短いこと、12音技法の使用という点でヴェーベルンの歌曲とも通じるが、洗練の妙とも言えるヴェーベルンに対して、クシェネクの作品はやや土臭く感じられる。

ヘルマン・ロイター（1900-1985）：フリードリヒ・ヘルダグリーンの詩による3つの歌曲 作品67 1946年

ロイターはシュヴァルツコプフやディースカウ等の伴奏者として活躍し、シュトゥットガルト音楽大学の学長を務め、当地におけるフーゴ・ヴォルフ協会の創始者としても知られていた。作曲家としては舞台作品と声楽曲に力を注ぎ、特にヘルダグリーンのテキストによる数々の作品は高く評価されている。

この曲集にはヘルダリーンの「ディオティマ体験」と言われる運命の恋人ズゼッテとの邂逅があったフランクフルト時代（第1曲）とそれ以後の詩（第2、3曲）が採用されている。最高の喜びと最高の悲しみを体験した彼は、もはや詩人として生きるしかない自分の存在意義を改めて強く自覚したのではないだろうか。これらの詩作からは彼の詩人としての成熟が感じられると同時に、彼の学生時代以来の古代ギリシア研究の深まりが見られる。

#### 第1曲：沈む太陽（原詩：1798年8月以前）

この詩はドイツの抒情詩人たちが達成した最も完成された、最も美しいものに属するとも言われている。詩中の「魅惑的な太陽の若人」とはギリシア神話に出てくる太陽神アポロンのことで、アポロンはまた芸術も司り、豎琴の名手とされている。また神話によるとアポロンは、夜の時間は彼を崇める敬虔な民「ヒュペルボレオイ」（北方の彼方の住民）の住む白夜が支配する国で過ごしていたそうである。

#### 第2曲：夜（「パンと葡萄酒」より）（原詩：1800-01年）

ヘルダリーンの最大のエレギー（悲歌）と言われる「パンと葡萄酒」（全9詩節）の第一詩節であるこの詩は、1807年にある「年刊詩集」に「夜」の表題のもとに公にされた。それ以来ブレンターノやヘッセ等、この詩の秀麗な叙情性に見せられてきた人は少なくなく、静かな町の夜の情景が詩節の末尾では宇宙的とも言える広がりを見せる。ロイターが付けた音楽からも静かな感動と気品高い叙情が伝わってくる。

#### 第3曲：人生行路（原詩：1800年夏）

1797年4月の妹への手紙の中でヘルダリーンは「若い時に、上へ上へと志すのは悪くない。しかし人生もさらに円熟すると、再び人間的なものを、静かなものを好むようになる。」と書いている。また数か所にギリシアの哲学者ヘラクレイトスの言葉からの引用（「弓や豎琴のように、互いに逆方向に引き合うことで調和が生まれる」、「上り道も下り道も一つで同じもの」）が見られる。この付曲では緊張度の高いアスクレピアデス風のオーデが無窮動のピアノパートに支えられて力強く感動的に歌われる。

## 4. リサイタル当夜の報告

前半はまず20世紀作曲家のゲーテ歌曲を各1～2曲演奏した。R. シュトラウス、R. トゥルンク、A. ツェムリンスキー、A. ヴェーベルン、H. アイスラー、P. デッサウの6名だが、R. シュトラウス以外の作曲家の作品は演奏されることがまれである。特にトゥルンク、アイスラー、デッサウにおいては初めて耳にした聴衆も多かったのではないだろうか。前半の最後にはH. ヴォルフの《ミニョンの4つの歌》を取り上げた。

休憩後の後半は3人の20世紀作曲家の歌曲を選んだ。最初にウィーンで活躍し150曲ほどの歌曲を残したJ. マルクスから4曲、そしてオペラ《ジョニーは演奏する》で一躍有名になったE. クシェネクの12音技法を使用した《カフカの言葉による5つの歌曲》、最後にシュトゥットガルトで活動し、当地におけるH. ヴォルフ協会創始者となったH. ロイターの第二次世界大戦直後に書かれた名曲《ヘルダリーンの詩による3つの歌曲》を演奏した。

会場には例年通り多くの聴衆が詰めかけ、アンコールまで熱心に聴き入ってくださった。音楽雑誌『音楽の友』2023年1月号に「これだけたくさんさんの作曲家の作品を並べたプログラムを作るのは、選曲の流れや集中力の配分を含めて多くの困難が伴う。このプログラミングや、解説と対訳も自分たちで行う姿勢は極めて学究的だが、このデュオは決して銜学趣味に陥ることなく、「歌う喜び」を湛えた音楽を形作る。コンセプトにかなう楽曲の「発掘」から始まる知的な作業と、それらに血肉を与えて演奏へと昇華させるための膨大な作業がこの約90分あまりの時間に凝縮されていることを、二人の演奏を楽しみながら改めて思う。とくに今回の演奏はここ数年かのこの

デュオのリサイタルのなかでも出色のものだ。二人が勤務する国立音楽大学の助成公演だが、学生たちにこうした姿勢を示す意義は大きい。(後略)」とこの演奏会への好意的な批評が掲載された。また来年度も新たなテーマによる演奏会を企画しているが、それに向けて準備を続けていきたい。

#### 謝辞

この演奏会は「2022年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）」の助成を頂きました。ここに深く感謝の意を表します。